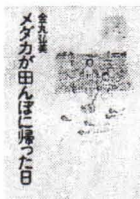


自然と共存する農業の姿を探る
『メダカが田んぼに帰った日』

金丸弘美



学習研究社
1200円＋税
装丁／阿部美樹子
装画／沢野ひとし

不耕起栽培という、文字通り「耕さない」米作りがある。前年の稲を刈り取った後の稲株や切り藁が残る田に苗を植え、農薬も化学肥料も使わない。藁を分解する微生物の働きが藻を育て、その藻が水を浄化し酸素を供給する。こうして「耕さない」田は虫やメダカが無数に棲息し、白鳥やガンも飛来するようになった。自然を守っていたはずの農家が、経済効率ばかりを優先し、利便性の追求に目の色を変えた結果、田んぼや里山から生き物の姿が消えてしまった。と語る実践農家の言葉は、高度成長以来の農産物の「工業規格化」に反省を迫り、自然と融和する農業の未来像も示してくれる。（習）